

のうがくかい

「なごやか農楽会」だより 76号

2023年11月（冬）号



八事五寸人参

- ◇ なごやか農楽会からのお知らせ
- ◇ 援農作業予定 (12～2月)
- ◇ 援農作業実績 (8～10月)
- ◇ 農家さん紹介／あいちの伝統野菜など

なごやか農楽会からのお知らせ

農業センターが一部リニューアルオープンしました

名古屋市農業センターは、2023年3月からリニューアル整備が始まり休園していましたが10月6日よりBBQ広場等部分開園しました。農業センターまつりも規模を縮小して行われました。牛舎等の全面オープンは来年3月になります。（土日、祝日は駐車料金が有料化されました、1時間以内は無料。）

本年度第4回目の研修（仮題：名古屋の農業の現状）は、3月頃実施予定です。詳細がわかり次第連絡いたします。

なごやか農楽会からのお知らせ

評議会報告

報告・審議・検討事項の概要

8月度会議（休み）

9月度会議（9月9日開催）

- (1) 各支部・援農塾 活動実績の報告
- (2) 評議会開催について、10月度は農業センター指導館で開催、午後HP運営委員会を同じ場所で開催。11月以降も農業センターで開催するが引き続き指導館になる。
- (3) 新規援農希望の「ミカン農家 濱島さん」の件（横井）7月に都市農業課 早川技師、みどり支部 横井・滝の3名で訪問。農地の状況、農家要望について報告あり（土日の作業になる）。草取りだけの依頼では援農対象外、援農対象の作業があれば新規援農先に登録する方向とし、作業内容を提案するなど再度農家さんと調整することとした。

(4) 農業センターまつり出展について
出展内容は昨年と同様に「チラシ配布」のみとする。
3日間の出展とする。

(5) 農家訪問・紹介（原稿作成等）について
ふたむら農園（港・中川支部）：水野・佐藤が取材担当
永井修（みどり支部）：川合・中地が取材担当
取材日は、11月で担当支部長が調整する。

(6) 農楽会だより（11月号）原稿依頼について
毎年、支部にて担当することとしており、今年度はてんぱく支部にて原稿を作成する。

(7) その他
・高所作業、草刈り機等の使用について
農楽会として、「①草刈り機・トラクター等の使用禁止
②2メートル以上の高さの場所での脚立使用は必ず2名以上で。使用できるのは上から2段目まで」ということを確認した。

(8) HP運営委員会第2回打合せ内容報告
HP掲載の具体的なコンテンツについて検討する。

10月度会議（10月14日開催）

(1) 各支部・援農塾 活動実績の報告

(2) 農業センターまつりについて
出展内容は、なごやか農楽会案内ちらし配り、パネル展示（2枚）とする。配布チラシについて、用紙は緑色、300枚作成。農楽会ホームページアドレスを明記、「農業ボランティア育成講座」の問い合わせ先を分かりやすく、農楽会のうえにフリガナ等修正する。

(3) 農家訪問・紹介について
永井修（みどり支部）：川合・中地が取材。
11月18日（土）10時現地集合（大府市）。

(4) 12月2日の研修について
午前6名、午後5名申込あり。各支部で再度案内する。
(5) HP運営委員会第3回打合せ内容報告
お知らせ、農楽会について、活動紹介、ボランティア育成講座についての4コンテンツについて検討を行った。次回は情報の収集方法、担当について検討を行う。

[依頼] 各支部にHP運営委員会と情報のやりとりを行う担当を選定されたい。

(6) 新規援農希望の「ミカン農家 濱島さん」の件（横井）草取りだけの依頼では対象外と先方に伝えたとの報告あり。



てんぱく支部 八事五寸人参の紹介

てんぱく地区の主要農作物であるニンジン、「八事五寸人参」という伝統野菜を紹介します。大き目（15cmから20cm）で、色鮮やか、甘味が強いという特色があります。栽培は8月種まき、その後9月から間引きを3回ほど行い、1月から3月に収穫します。そのほぼ全ての作業にてんぱく支部会員が援農参加しています。

八事五寸人参の歴史は、1919年大正8年 東京の種苗店から仕入れた3寸人参の種が始まり。その後、毎年農家が自分の畑で出来の良いニンジンの種の自家採取を続け（現在でも行っています）、昭和の初め頃「八事人参」のブランドが定着しました。当時は関東関西まで出荷されたそうです。戦後、品質を確定、大きくて長い「八事五寸」の名で呼ばれるようになりました。戦後も天白区の農家篤志家が青森県まで生産指導に行っていたと聞きました。1964年昭和39年には2500トンの出荷量の記録がありますが、現在は100トンを下回るそうです。しかし、現在でも市場に出荷されており、珍しい「現役」伝統野菜と言えます。これからも伝統を守る農家の力になっていきたいと思ひます。



農業センターまつり出展

援農作業予定 (12～2月)

てんぱく支部



ニンジンの収穫

12月
ブドウ剪定、ミカンの収穫
小松菜の整理

1月
ニンジンの収穫

2月
ニンジンの収穫

みどり支部

支部会員へのお願い

援農作業風景の写真を募集しています。
農家さんにご迷惑をおかけしないよう事前に
了解を頂いた上、休憩時間の前後の時間に
撮って下さい。支部長と相談の上。

12月
ぶどう・柿の整枝選定
さつま芋のつる埋め戻し

1月
ミカンの整枝剪定
ぶどう及び柿の粗皮削り
ミカン・ポンカン収穫、敷草引き

2月
トマトの脇芽取り
ニンジンの収穫

援農作業予定 (12～2月)

もりやま支部



ブルーベリー剪定

ぶどう皮むき



12月
野菜収穫、畑整理・片付け、草取り
ぶどう剪定・蔓切り、梅剪定

1月
野菜収穫、畑整理・片付け、草取り
ぶどう皮むき、梅・柿剪定

2月
野菜収穫、畑整理・片付け、草取り
ぶどう皮むき、ブルーベリー剪定

港・中川支部



里芋集荷・調整



里芋収穫

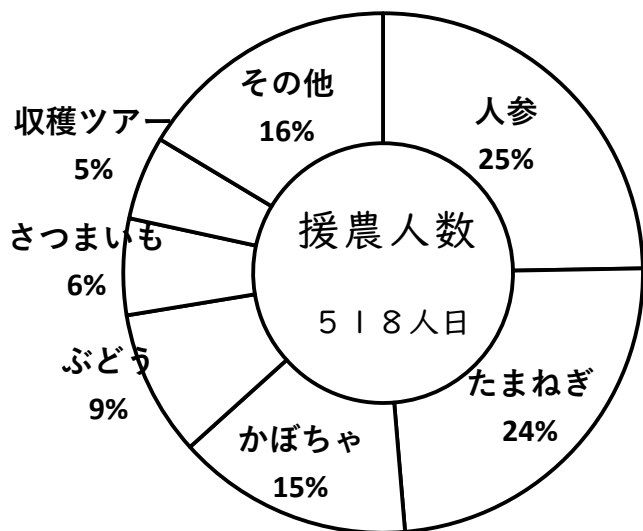
12月
里芋の収穫・調整
レタスの袋つめ、春菊の出荷準備
ミツバ出荷調整、春菊畑の草取り
トマト下葉落とし、芽かき

1月
里芋の収穫・調整、
ブロッコリーの収穫・袋つめ
ミツバ出荷調整、春菊畑の草取り
トマト下葉落とし、芽かき

2月
里芋の収穫・調整
ジャガイモの植え付け
とうもろこし・枝豆・ナスの播種
ミツバ出荷調整
ブロッコリーの収穫・袋つめ
トマト下葉落とし、芽かき

援農作業実績 (8～10月)

てんぱく支部



1人日=1人1日3時間の援農作業

三か月間(8月～10月)の援農実績は、103人日。
累計(2月～10月)は518人日。
三か月間の援農先は、2農家。

援農作業は、人参間引き・モミガラ蒔き、種まき、
さつまいも収穫・出荷手伝いが主な作業。

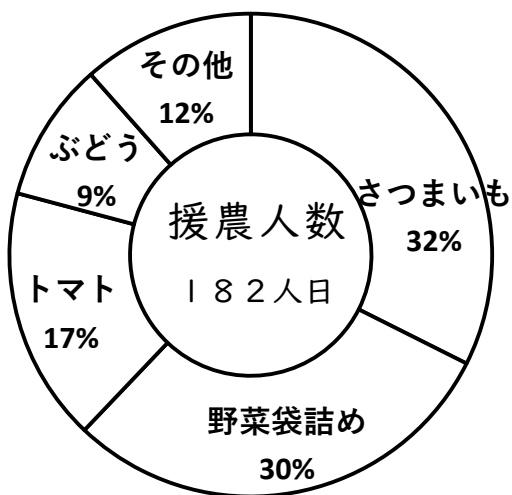
その他、かぼちゃツル燃やし朝市手伝い、草取りなど

昨年同期(8月～10月)の援農実績 88人日
昨年の累計実績は、570人日



ニンジン間引き

みどり支部



1人日=1人1日2時間の援農作業

三か月間(8月～10月)の援農実績は、47人日。
累計(2～10月)は182人日。
三か月間の援農先農家は、3農家。

援農作業は、さつまいも畑のつる切り、つるおこし、
マルチはがし、野菜の袋詰めが主な作業。

その他、トマト支柱立て、柿の収穫、育苗ポットへの土
入れなど

昨年同期(8月～10月)の援農実績 46人日
昨年の累計実績は121人日。

援農作業実績 (8～10月)

もりやま支部

三か月間(8月～10月)の援農実績は、121日。
 累計(2～10月)は407人日。
 三か月間の援農先農家は、3農家。

援農作業は、ワイン用ぶどう収穫、ぶどう出荷作業、
 蔓切り、ブルーベリー収穫など

この他、トマトの誘引、クリップ外し、堆肥運びなど

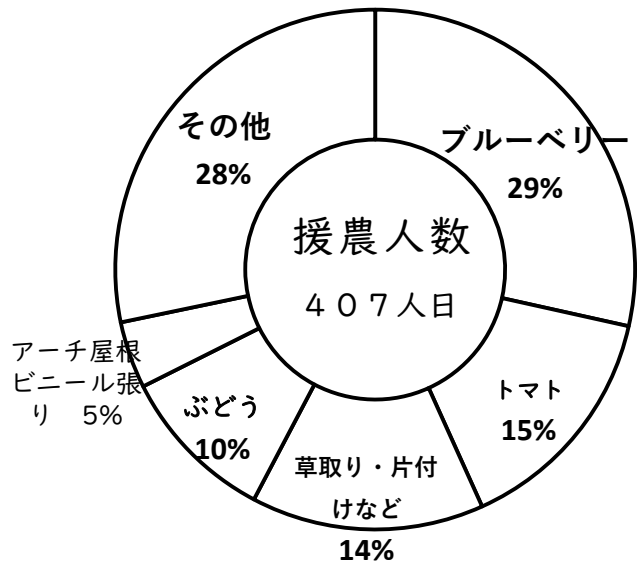
昨年同期(8月～10月)の援農実績 115人日
 昨年の累計実績は432人日



ぶどう収穫



ブルーベリー植替え



1人日=1人1日2時間の援農作業

港・中川支部

三か月間(8月～10月)の援農実績は、96人日。
 累計(2～10月)は398人日。
 三か月間の援農先農家は、5農家。

援農作業は、ミツバ調整、箱作り、サツマイモ蔓切り・
 芋掘り体験補助、ブロッコリー定植など

この他、野菜播種(ブロッコリー、カリフラワー、キャベツ、
 ハクサイト、ケール)、野菜収穫(カボチャ、サトイモ、サツ
 マイモ)等

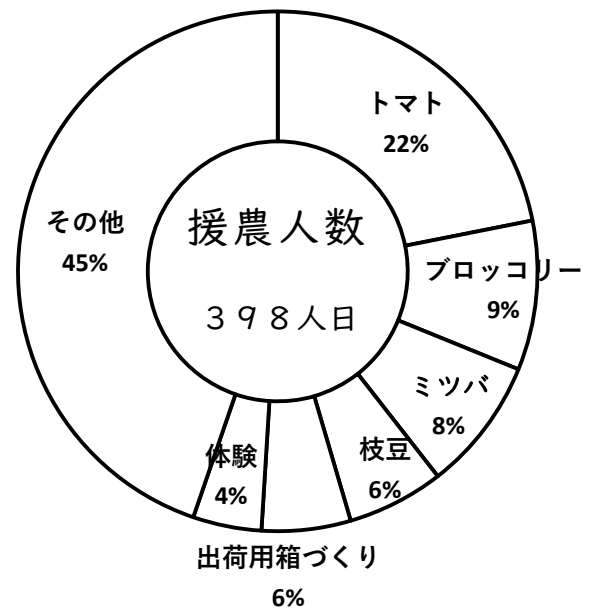
昨年同期(8月～10月)の援農実績 70人日
 昨年の累計実績は292人日



さつまいも蔓切り



園児芋ほり補助



1人日=1人1日2又は3時間の援農作業

農家さん紹介

立松農園さん

中川区の「立松農園」さんは、水耕「三つ葉」を栽培されています。水温やハウス内環境を調整しながら年6~7回栽培し、春夏秋冬に関わらず毎日「三つ葉」を出荷できるよう頑張っています。



園主の立松和彦さんは、現在56才、20年程前にお父様が亡くなり、後を継がれました。当時は、土木設計会社にお勤めで、それまで家業を手伝うこともなかったため、まさに畑違いの農業に就くことになり、戸惑うことも多くありましたが、周りのアドバイスをもらいながら、切磋琢磨をしながら農業に取り組んで来られました。中川区でも水耕栽培に取り組む農家はたくさんあり、立松農園では、お父様の代に、ハウス土耕「三つ葉」を水耕栽培「三つ葉」に切り替えました。「三つ葉」は、茶わん蒸し・お吸い物等の添え物程度の利用が中心ですが、和彦さんが出荷している丸江出荷組合では、「もっと身近でたくさん食してもらえる野菜」となるよう、テレビ・新聞・ネットメディアへの露出、イベントなどに取り組むとともに、フリーズドライ商品や漬物など2次製品の新規開発などを含め、販路拡大に向けて奮闘しています。

農楽会については、「JAを通じて話しは聞いていたが、無料で手伝ってもらえるなんて!？」と敬遠されていたようですが、隣の加藤さん（こちらも港・中川支部の援農先）の畑で時おり見知らぬ方々を見かけることがあり、農楽会のボランティアのことを思い出し、いくらでも人手が必要な仕事なので、2年くらい前からお願いしたとのこと。「三つ葉」の出荷作業は基本的に単調な作業ではありますが、ボランティアの方には直の野菜に触れていただき少しでも農業を体験してもらえるように心掛けておられるそうです。

「農楽会の方々と他愛ない会話をしていると、日々マンネリ化した日常に新しい刺激をもらえ、ボランティアが来る日を楽しみにしている」と言っていました。

最後に農楽会に望むことを伺いました。

「農楽会だよりは、私の紹介は読み捨てていただいてもいいので、他の農家さんの野菜関連の自慢話や苦労話を掲載してほしい。あわせて農楽会の会員の方も育てている野菜や自慢レシピなども掲載されるといっそう興味深くなるのではないかと。折角ボランティアに来ていただいても年に数回顔を合わせるだけだと顔と名前が一致しないことがあり、心苦しく思う。名札や簡単な自己紹介名簿一覧（顔写真や入会志望動機）を援農先に配っていただけると人となり把握しやすいので検討願います。」とのことでした。



はじめよう！ 家庭菜園(*1)

今月号は水やりについて紹介していきます。

水やり3年と言われるほど、簡単そうに見えて実は奥が深い作業の水やり。水をやり過ぎると根を傷めたり、腐らせたりしてしまうし、反対に乾きすぎても野菜を枯らす原因となってしまいます。日々野菜の生長や土の乾き具合を観察して適切なタイミングで適度な量を与えることが重要です。特にプランター栽培の場合は乾燥しやすいので、注意しましょう。

1. 水やりに適した時間帯って？

一般的に朝の時間帯（野菜が活動を始める前）に水をやるのが望ましいとされています。夏場は日中の高温時に水をやると、土中で水温が上昇してしまい、熱湯をそそいでいるのと同じ状態になってしまうので、注意が必要です。

日中に野菜がしおれてしまう場合は涼しい時間帯にもう一度水やりを行うのも良いでしょう。

寒冷期は地面の凍結がとけて午前中の時間帯を選びます。冬の夕方に水やりをすると夜間のうちに水が凍結してしまう恐れがあるので、気をつけましょう。

2. 水やりに適した水温はどれくらい？

水やりには水温が重要です。水やりに適した温度は基本的に常温。私達があまりに冷たい水を飲むと内臓へ負担がかかってしまうのと同様に、野菜も水が冷たすぎると吸収が悪くなると言われています。



反対に夏場はハウス内に溜まった水が高温になっていることが多いので野菜に与える前にきちんと温度を確認するようにしましょう。

3. 植え方によって水やりの回数は違うの？

地植え

それほど頻繁に水をやる必要はありませんが、植付け時や雨の降らない期間が長く続いた場合などは意識して行うようにしましょう。

鉢植え

土の表面が乾いているようであれば水やりが必要です。ただし、表面が乾いていても鉢底に水が溜まって、根が窒息気味になってしまう場合もありますので、竹串を刺して下部の土の乾燥具合をチェックするなど、鉢全体の状態を把握する必要があります。鉢に受け皿がついている場合は、水やりのあと受け皿に溜まった水を必ず捨てましょう。

(*1) はじめよう家庭菜園は、なごや農業協同組合様が発行されるCITYなごやに掲載されています。なごや農業協同組合様のご承諾を得て、掲載しています。

あいちの伝統野菜

今月号はフキです。

フキはキク科の多年草で、日本、中国、サハリンなど東洋に広く分布しています。中国でも古くから食用にしたらしいが栽培化はわが国で進み、数少ないわが国原産の野菜です。フキに関する記録は古くからあり、天平勝宝二年（750年）の東大寺正倉院文書に落拾園とあることから、奈良時代には園地で栽培していたと思われる、平安時代には、園菜として栽培され、漬物として貯蔵もされ、花（フキノトウ：フキの葉が開く前に出る花のつぼみ）は薬用として利用されるなどかなり普及していたことが知られています。

フキの品種はそれほど多くないが江戸時代前期にはすでに水落などが成立していたことが百姓伝記などの農書に記されています。

わが国のフキには二倍体種（染色体数58；基本数29）と三倍体種（染色対数87）があることが知られ、愛知早生と水ぶきは三倍体種、秋田落は二倍体種です。フキは雌雄異株で、愛知早生は栽培地が違ってもすべて雌株で種子は結ばず株分けて増殖しています。秋田落は雄株もあるが、栽培株の85%は雌株で、放任すると種子もできますが、実際栽培では株分けて増殖しています。

わが国の主な品種は次のとおり。

・愛知早生

愛知県では江戸時代からフキを栽培し販売していたが、当時のフキは晩生で愛知早生の発見後フキの産地になった。愛知早生（知多早生、尾張早生）は、今から180年程前知多郡加木屋村（現東海市）の早川平左衛門の畑で見出された品種といわれ、明治29年には西枇杷島町、清州町、甚目寺村などの園芸地帯に導入された。これに伴って、フキ栽培は盛んになり明治40年には愛知県の作付面積は65ヘクタールになった。その後、油紙障子をかける半促成栽培技術が開発され、作付面積は一層増加し、昭和10年には425ヘクタールに急増した。

愛知早生は従来の品種より大形で淡緑色の葉柄の基部は淡赤紫色になり、俗に赤落と呼ばれる。愛知早生は愛知県ばかりでなく、全国各地のフキ栽培地ではほとんど本種を栽培し、このような一種類一品種という例はほかになく、愛知早生発生の意義は大きい。

・水ぶき（水ぶき）

小ぶりで暖かい地方のフキから改良された栽培品種。やわらかくて苦味が少ないのが特徴で、収穫量は少なく関西で少量生産されている。

・秋田大落

寛延年間（1749年頃）雪沢村で見出したものと伝えられている。秋田大落が全国的に有名になったのは当時の秋田藩主佐竹義峰侯が江戸で諸侯にフキのことを話したところ一笑に付されたので、早飛脚で雪沢村長木沢のフキを江戸に届けさせ、諸侯を驚かせたことから、以来秋田落の巨大なことが全国的に知られた。

葉柄の直径が5～6cm、長さが1.3～1.4m、長いものは2mにもなる。肉質はかたく、主に佃煮や砂糖漬けなどの加工用に利用される。葉と葉柄はわか雨の際には傘代わりになるほど大きく、うっそうと秋田落が茂る場所には、コロボックルとよばれる小人が住んでいたというアイヌ伝説が残されている。愛知早生が愛知の伝統野菜に選ばれています。

参考文献

日本のふるさと野菜（一般社団法人日本種苗協会発行）
日本の野菜文化史事典（青葉高著 八坂書房2013）
愛知県園芸発達史（愛知県園芸発達史編さん会）
あいち在来種保存会・野菜ソムリエの「あいちの伝統野菜」（ブログ）
愛知県HP愛・地産・アラカルト 農業水産局農政部園芸農産課

編集後記

長かった暑い夏が終わり急に冬になりました。今年は、インフルエンザが早期に流行し、インフルエンザ・コロナウイルスに気を付けながらの日常生活となっています。農業センターは、来年3月の全面開園に向けて一部リニューアルオープンし、BBQ広場など公園化が進んでいます。急に寒くなりましたので、風邪、インフルエンザ、コロナにかからぬよう対策して援農をお願いします。

発行

なごやか農楽会事務局（水野・佐藤） 令和5年11月30日発行

なごやか農楽会は、名古屋市内の農家のお手伝いを主な活動とする農業ボランティアグループ。

会員は、全て農業ボランティア育成講座修了生です。



あいちの伝統野菜

次号はほうれん草を紹介します

愛知早生



香りが高く葉柄の伸びが早く、太い。生育が旺盛で収量も多い。

写真：あいち在来種保存会提供